

随 想

歩く (gehen) ——言葉は裸で現われるか等をめぐるモザイクの試み——

藤 井 忠

歩く。部屋を出て歩きます。鬱陶しい、あなぐらのような部屋を出て。

歩こう。いい空気を吸おう。いや、ちょっとお待ちください。ほんとうは、あの、もやっとして冷たい空気の漂う場所から出たくはなくなっていました。

部屋に入るときには、いつものように少し抵抗がありました。それが、椅子に腰掛けてしまうと、今度は、その虜になってしまうのです。ご飯ですよという日常の声がドアの外から聞こえてくると、ああ、うるさいことよと思うような状態になっているのです。

勤勉だからではありません。少々どぎついのですが、習慣の奴隷というのが当たっています。一種フレグマーティッシュな状態のなかに入ってしまうのです。まだだ、もうすこし……しかしそこで何が生まれたというのでしょうか。たしかにわずかばかりのものが活字になって外部へ持ち出されましたが、心を占めるイメージは、ひとところを穿っていく日々であり、単調で緊張を伴う事柄の反復です。

「魚のいない川に網を沈めた漁師の、あの絶望的な不屈さをもって生きながら」待つ。[ムージル『特性のない男』] ——このような比喩で自分の生を表現する以外にはなく、比喩を自分に課することによってかろうじて日々に耐えうるということにもなるのです。私を閉じこめた部屋は、このような不毛な時間をもじっと眺めてきました。

部屋にいるということは、私の場合、椅子に腰掛けていることと同じです。やがて、頭が熱くなってきて、単調な営為から、陶酔の瞬間が生まれ、謎めいたものを解きつつ、謎に導かれ、ある世界へと入ってゆくこともあります。そういうとき、椅子は、固いほうがよい。詩に対応しうるような固さをもった椅子がよいのです。といっても、安楽椅子の魔力を知らないわけではありません。ぐったりと身をゆだねるときの状態に

憧れないわけではありません。その感触を知ったのは子供の頃です。実際に安楽椅子に腰掛けてそれを味わう前に、書物で知りました。安楽椅子に坐った者の記述によってではなく、椅子となって人を坐らせる側の告白によって知りました。短篇『人間椅子』や、その他一連のものを読んでから、乱歩を開くことはなく、その後さまざまのものを経てきたにもかかわらず、少年時代の読書から得た感触がいまだに残っているのをふしぎに思います。

大型の安楽椅子を作った腕のいい椅子職人が、仕上げたばかりの己れの作品にまず魅せられて、その椅子のなかに、^{きんがい}奇怪な恰好で入り、みずから椅子となり、美しい肉体を革の表皮をとおして微細に感じ、その物体を好きなようにかき抱く、というお話です。彼は醜い男だと自分で言っていました。唯美主義と犯罪の臭いのする奇妙な告白文が少年にとくべつ影響を及ぼしたわけではないのですが、ただ、この小説を読むことで、むしろどのような安楽椅子にも満足しなくなったような気がします。固い禁欲的な椅子がもたらす精神の陶酔の何程かを自覚するのは、もう少しあとになってからです。

椅子は、立ちっぱなしの苦痛や不安から解放し、安堵の気分と定住の安定感を与えてくれます。椅子は、寝転んで本を読むあの心地よい怠惰な受け身の形と異なり、書物に対して積極的な、攻撃的な体勢をつくってくれます。そして時として上に記したような精神状態へと導いてくれます。しかしこれが人間を徹底的に痛めつけるための道具に用いられてきたことを思わぬわけにはいきません。刑事の尋問に、椅子は欠かせません。椅子に坐らせられた容疑者は、活字を照らすべき照明を顔面に当てられます。尋問者もまた椅子に腰掛けませんが、そちらはたいていラフな恰好で腰掛けます。ゲシュタポなら、もっと巧妙に残酷に、椅子の効

用を發揮させたことでしょう。憩いと安堵を与えてくれる椅子の効果を心理的にも活用し、狡猾に拷問に用いたことでしょう。ちょうど何週間か前、江戸川乱歩についての番組（教育テレビ）のなかで、『人間椅子』が取り上げられて、安楽の場、肉体を柔らかく包み抱くエロチックな具であるとともに、一方、拷問の道具となり、さらには死刑の象徴となる椅子について、どなたかが語っていました。

椅子から立ち上がりたくなる瞬間があります。椅子を離れ、部屋のなかを歩き回りたくなることがあります。ゲートのように手をうしろに組む。歩きながら考え、立ち机で何事かを書き留める。だが残念ながら、私の部屋はそのような作りになっておりません。坐り机だと、物に飽けば、そのままごろりと畳に身を倒し、寝転んで庭の立ち木をしばらく眺め、空を見つめていてもよいのですが、ここは日本間ではありません。一旦椅子に腰掛けたら、その姿勢を保持するしかありません。窮屈な恰好で、わざわざ安楽椅子のなかに入りこんだあの男とはちょうど逆の立場であります。

つまり、姿勢を変えるには部屋そのものから脱出するしかないのです。

「書を捨てよ、町へ出よう」という声が聞こえてきます。その詩人は生存中からこうして呼びかけてくれていました。そうだ、部屋を出よう。牢獄でもあり心地よい湯ぶねでもある場所を。

*

歩こうと心にきめました。まだためらっています。——ばかな、歩けばいいんだ。何も考えずに歩くことだよ。

そうです。べらべらとまくしたてて、「文字を正確に心得ていながら、その精神を毒する」のは愚かであり、「平凡で明白なもの」にあれこれ附着させて、「奇異な印象を与えてはならない」、のであります [ポオ『実業家』]。私もそのことを考えていたのです。「何も考えないで歩く」ということを、考えはじめていたのです。歩くという、ごく「平凡で明白な」行為を、私の妄想じみたことで汚さずに、そのまま実行できるのかと。

大先輩の、十八世紀の「孤独な散歩者 (promeneur solitaire)」は、散歩の時を孤独と瞑想の時、「完全に自分であり、自分にうちこめる時間」とみなし、「そ

の折々の夢を忠実に記録」していきました。何も考えないどころか、例えば「虚言について反省してみる」というテーマをもって散歩をはじめます。『告白録』を書いたこの思想家は、散歩についても一つの型を示してくれました。このような瞑想・思索のための散歩に欠かせないのは、田園の風景です。規模の大小は別として。

私が暮らしているのは都会です。都会を歩く。と、はやくも一つの姿が浮かんできました。パリを歩くマルテ。「見る (sehen)」ことを学んでいると自覚する彼がパリの街路で見る光景が蘇ってきます。——歩く。旅ではなく、ハイキングではなく、散歩、または散策という優雅な言葉ではなく、ただ、歩く。——マルテにつづいて、さまざまな小説のなかから、主人公たちが街を歩いている情景が現われてきます。改まって「歩く」と書いたものの、これから先は、いわば屋上屋を架すの類いかもしれません。

だが、思い切って、手近なことからはじめてみることにします。

今日、どこかへ行くときは、乗り物で行くのが普通で、しかも、多くの方はクルマを所有していて、すぐ近くでも、自分のクルマで行く。無表情にキーを差し込んで、あとは、いつものボタンという音とともにその姿は消えています。昔なら、ひとかどの人間なら馬に乗るか、馬車に乗って行くところでしょう。

「クセノフォンの中に、馬を所有する人に徒歩で旅行することを禁ずる法律のあることが書いてある。」——モンテーニュの『エッセー』を読んでいたなら、こんな文にぶつかりました。「取引きや商談や会談や散歩などあるゆる公私の用務も馬上でおこなった」と。

そして馬に乗っている者と歩いている者との決定的な違いが、つぎのように書かれています。「彼らの間の自由民と奴隷のもっともいちじるしい相違は、前者が乗馬で後者が徒歩という点にあった」と。

モンテーニュ自身のことを引用しておきましょう。——「私は馬に乗ったらなかなか降りない。馬上は私が健康につけ病気につけ、もっとも気楽にかんずる席であるからだ。プラトンは健康のために乗馬をすすめている。プリニウスも、これが胃と関節の健康によいと言っている。」

歩く者、^{から}徒の者、徒士、足軽、その他大勢、顔があつて顔のない者たち、無名の者たち……

クルマが通り過ぎてゆく。メーカーにより、その型により [社会的] 存在を表示 (誇示) して、そしてクルマのなかの人は、自分の家のなかにいるのと同じ気分であるのでしょうか。クルマのなかで、「もっとも気楽にかんずる」場所なのではないでしょうか。クルマを、自分の家のようにしたい……しかし一方、彼はひとり顔をさらして歩いています。彼の姿が見えなくなるのは、人込みにまぎれていくときです。

彼は今、社会的存在としては何者でもないものとしてひとり歩いています。歩く空間は、「大都会」。(その対置として、改めて「田園」が現われる。)

大都会の遊民, *flaneur* (フラヌール) の視線。

「この都会を射る^{アレゴリカー}比喩詩人の視線、疎外された人間の視線。」「それは遊民^{フラヌール}の視線なのだが、彼の生活形式が、やがて来るべき悲惨な大都市生活者のそれに、なおひとすじの宥和の光を投げかけているのである。遊民はまだ闕の上に、つまり大都市と市民階級との、双方の闕の上に佇んでいる。(…) 遊民の姿を借りて、知性は市場へとおもむく。」[ベンヤミン『パリ——19世紀の首都 / ボードレールあるいはパリの街路』]

大都会。今日、そのイメージは高層ビルと群れなすクルマの騒音と、商品の氾濫 (市場、つまりデパート)、一方では、貧民街。今日、フラヌールは、つまりぶらぶら歩く者は、都会を彷徨う者は、遊民は、高度資本主義社会の繁栄と悲惨のそのなかを歩きつつ、疎外された者の憂鬱な視線を投げかけます。

そして、「『観察する者は』と、ボードレールはいう、『おしのびでいたるところを歩く帝王だ』。こうして遊民が知らず知らず一種の探偵になること……」[ベンヤミン『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』]

探偵。すぐに心に浮かぶのは、そしてベンヤミンが挙げるのは、ポオ。『室内装飾の哲学』において富を持つ者の私生活空間を描いた彼は、10頁たらずの短篇『群集の人』のなかに、大都会ロンドンを精密的確に描写します。「ポーにとって遊民は、何よりも、自己の社会に安住できない人間なのだ。だからかれは群集をもとめる。」(ベンヤミン)

観察者である「私」は、はじめは街路を歩く者たちを集団として見、しばらくすると眼は細部へと向けられ、貴族・実業家・弁護士・商人・株式仲買人たち、あるいは会社員や店員たち、さらには大都会にはかならずいる高等掏摸ども、博打師など、さらにはあらゆる

種類、あらゆる年齢の街の女たち、それぞれの階層の、姿態、服装、歩き方、容貌、表情をつぶさに眺めます。夜の更けるにつれ、群集の性格が変わり、一種荒涼たる光の効果のなかで彼らの表情を観察していた「私」の眼は、年齢65か70歳の老いた男に引きつけられ、この老人のあとを付けます。日は暮れ、霧が深く垂れこめ、雨は本降りになり、街路の雑踏は増す。老人は、繁盛している市場のなかを歩き、店を見、商品を見る。「百貨店が遊民の最後の地域だ。かれは商品の迷宮のなかをさまよひ歩く。」(ベンヤミン) 再び大通りへ出た彼は、露地へと入り、人通りの減ったその狭い石畳を歩調をおそめて歩く。「これといって当途もないように、ひどくためらい勝ちに」、「これという目的もないらしいのに何度も同じ道を横切って」往復しています。

人々の行き交うなかで、老人は「顎を深く胸に埋め、八の字に寄せた肩の下からは、狂気じみた眼がぎょろぎょろと、四方八方、彼を囲む周囲の人々を眺めまわしている」。彼は「ただスタスタと一途に歩いて行く」のです。

老人は何者なのか。読者は、尾行する「私」とともに息をのむようにして読みすすみますが、個人としては何者でもない、というべきです。何者でもないことによって、彼こそ「群集の人」なのです。人込みのなかにまぎれて探しだされるのが困難になる。それに「比例して、嫌疑の種になる」(ベンヤミン) という逆説のなかに、彼はいます。観察者である「私」は、老人を一瞥した瞬間に怪しんだのでした。「嫌疑」をいだいた。「すばらしい智能、警戒心、貧窮、貪欲、冷酷、悪意、残忍、得意、上機嫌、過度の恐怖心」、そして「極度の絶望」という一連の観念が、老人の表情分析とともに浮かんでいました。あてどもなく歩くこの人物は、「群集の人」という概念の具現として描かれています。観察者はそれを「解説を許さない」ところの「醜悪な書物」に比するのです。

このような短篇に接すると、こちらは釘づけになってしまう。もう外へは出られなくなります。

観察者は尾行していました。尾行する者には対象ははっきりしています。しかし対象を見失うことはないのに、謎を追っている者の不安が感じられてきます。彼が追跡しているのは、これまで体験したことのない異様なものであることを彼は予感しています。尾行されている者のほうはそれにはまったく無関心です。彼

自身、「狂気じみた眼」で周囲を眺めているのですが、何に注意を向けているのか分からない。彼の存在そのものが茫漠としています。茫漠としていて、鋭く、残忍で、厭らしいものがあります。尾行者が最後に彼の前に立ちただかっても気づきません。彼は何かを追われるようにして歩いているのです。何かを求めて歩きつづけている。何かを求めざるをえない衝動に追い立てられて歩きつづけている。彼自身はおそらくそれが何であるか分からないでしょう。自分が何かに追い立てられていることすら知らないかもしれません。夜が明け、朝になり、昼になり、再び夕暮が訪れ、尾行者が尾行に疲れ果てて尾行をやめようと心にきめても、「群集の人」は歩きつづけている、いまなお歩きつづけているのでしょう。「群集の人」だから歩きつづけて、安らぐことがない……その老人の内側を、観察者は上記のような語を連ねて言い表わしております。しかし、それで言いあてたのでしょうか。謎を追っていた彼は、最後に、謎の前に立ちふさがり、その「眼を見入った」のです。それでも謎のほうは気づかない。「解説を許さない」書物のように、孤独に荒涼たる姿で、歩を進めてゆきます。

いつから歩いているのかは分からない書き方ですが、ウルリヒというひとりの男、別名「特性のない男」が街路を歩いています。今度はウィーンです。かつてのオーストリア・ハンガリー二重帝国の首都です。しかしここではもうウィーンではあるがウィーンとはかぎらぬ、どこの都市でもよい、つまりそういう不確定さを含むところで今、事は描かれていきます。

特性がないというのは、責任の重心が人間のもともたなくなり、さまざまな事柄や行為が人間と無関係になり、自己の特性までが自己から遊離して、それぞれが、勝手に関係しあったり、彼の周囲に浮遊している状態をいいます。人間中心主義の崩壊、存在の非個性化をウルリヒは体現しているのです。

さて、やはり日が暮れていて、「都市というものの、凍死し石化した肉体」のなかを彼は歩いています。歩き、そして考えています。「裸の名詞」としての「精神」について考えています。この小説では、聞き慣れない言葉が突然出現して、消えていきます。裸の名詞としての精神もそうで、この夜の街路を歩いている場面にだけしか現われませんが、小説の問題とどこかで結びついて、見えないところで持続しているような感

じは残ります。この小説は、現実存在している姿と、現実化されてはいないが、もしかしたらそうでもありうるという可能性への感覚をもって感じとるところのものと、そういう二つの世界にまたがることを問題とし、「精神」にも二重の光が当てられます。

すなわち、「精神」はそれ自身でこの世にあるのではなく、他の何ものかと結びつくことにより存在しているのだ、と主人公は考えます。「忠誠の精神、愛の精神、男性的な精神」などの形で、「忠誠」「愛」「男性的」という語と結合してはじめて、精神という概念は、確固として存在するのであり、われわれのほうも、日常のなかで、「これこれしかじかの精神」という具体的な観念形態となった「精神」を受け入れます。諸々の事物がこの世界で現実化するときと同じように、精神もまたそれなりの付着物に覆われて、いわば天婦羅の衣に覆われてはじめて、あるいは「精神の燻製室」を経て、現実のなかに提示されるというのです。

「精神」というものがそれ自体でひとりぼつんと、剥き身のまま、現実にあるわけではないのだと。しかし、上に述べたように、さまざまの事柄について、現実化した姿だけでなく、可能なる場合について思考を凝らす特性のない男は、他のものといっさい結びつかない「精神」というものを、すなわち「裸の名詞としての精神」を考えてみるのです。この小説の作者独特の手法なのですが、「精神」を夜の都会の淋しい道端に出現させてみます。迷い出でた亡霊として。

「精神がひとりぼっちで、裸の名詞として、何かシャツの一枚でも貸してやりたい幽霊のように、何も身につけずに、そこいらにぼつんと立っていたら、——いったいどうであろうか」と。

そういう裸の名詞——何か他の名詞や形容詞と一緒にでなければ現実の存在物とはなりえない、それ自体は亡霊のごとき名詞が、ひとり、ふらりと、未練がましくこの世に迷い出でた姿を、主人公は心に描いてみます。ちらりと心に描くだけです。そうして彼は、そのようなものは、「出くわしたくない」代物なのであろう、と思います。

ポオの『群集の人』の「私」は、この「出くわしたくない」概念そのものを見た、とあってよいでしょう。そして「解説を許さない」ところの「醜悪な書物」のごときものをそこに感じとったのだと。

私たちは、「言葉の本来の（真の）意味において…」

ということと思うと、今度は「言うに言われぬ」などと、言葉を操ってはいるのですが、言葉そのものを考えていきますと、何か「解説を許さぬ」ものがますます感じられ、もしかすると「醜悪な書物」のような、開いて見てはならないものを予感することにもなるかもしれません。あるいは、迷い出でた亡霊の不気味な頼りなさを察知することになっていくかもしれません。歩くという動詞についても似たことが予感されてきます。

ひとりぼっちの「裸の」語彙は、現実には存在しない「亡霊」みたいなものです。というのも、「私達は語彙を、その切り離された状態から解放し、^{コンキテスト}文脈の関連の中に置き、^{コンキテスト}文脈と共にそれを一つの生活の場の中に置く。というのは、語彙は普通その様にして私達に接しているのである。(……)つまり、語彙は、文、テキスト、場、に本来属している。語彙とは何か、それは意味とどんな関係があるのか、を理解しようとするれば、人はその事を考慮しなければならない。そうしなければ、次々と思考困難におちいる。」[H. ヴァインリヒ『うその言語学』]

にもかかわらず、特性のない男は言語について根源的体験を求め、認識の冒険をつづけます。そしてこの未完の小説には厩大な量の原稿が残されます。

*

歩く。街を歩く、街から街を歩く、露地を歩く、長い扉にそって歩く。見る。考える。歩く。朦朧となる。頭がからっぽになる。歩く。何ものかに駆られて歩く。何かに惹かれて歩く。「えたいの知れない不吉な塊が私の心を終始圧えつけていた。(……)何故だかその頃私はみすばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りがすきであった。」

日々いつも歩く街路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなく、まったく別の都市に自分が来ているのだという錯覚を起こそうとつとめたりします。そしてある朝、何かに「追いたて」られて、街から街へと歩いてゆきます。

こんなふうにして、昔、私も家をさ迷い出て、東京の盛場をむやみに歩きました。人込みのなかを、何度も同じところを行ったり来たりしていました。

そしていま、部屋を出ようとしている私は、書物を捨てようとする私は、このようなことをも頭のなかから抜き取って歩きたいと思います。からっぽにしようと思ってもからっぽにならない頭を肩の上のせて歩くことになるでしょう。からっぽにしなければならないという強迫観念にとらわれないように、心をしずめて歩かなければなりません。やがて別の空気が寄ってきて、私は自分がひとりであることを感じだします。ウィーンの街をひとりで歩いているときのことを思い出します。もう少し若かったころです。街を歩いても、市電に乗っても、孤独感がひと塊の空気になって付き添っているように思いました。ぼくは動く、空気も動く、ぼくはここにいる、ウィーンにいる、しかしそれは、ここにいる、ここにはいないような、不安定な感じでもありました。それに似た現象が、ここでも時折起きています。今日もまたそうなるかもしれません。いつの間にか頭はからっぽになっているらしいのですが、からっぽであるという意識にみだされているらしく、奇妙な軽い頭痛のようなものを覚えはじめるでしょう。すでに、朦朧としてきました。空虚をいだきつづけるというのも楽ではない、と予感します。それでも、歩いていくであります。

先程の孤独な主人公は、果物屋に立ち寄り、檸檬を一個買います。檸檬の冷たさを心地よく感じつつ、どこをどう歩いたのか、最後に立ったのは丸善の前でした。「私」が何をするか、何をすべく促されていくかは、もう書くこともないでしょう。丸善の本棚に「黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢」である「私」が、己れのその想像を熱心に追求しながら、丸善が木っ端微塵になるのだと心に叫ぶまでの、細かな経緯は。

別の日、私は、黄金の爆弾を握りしめている「私」ではなく、この平凡な私は歩いていました。歩いていることを感じていました。肩のあたりに、もうひとり別の人間を感じていました。あの厄介な頭部をのせた肩のすぐかたわらで、別の人間が私と歩調をあわせていることを先程から意識していました。夕暮の人の波が押し寄せ、時折、波が押し入ってきて、ふたりはさっと離れ、交わされていた言葉が飛び散ります。言葉

の切れ端が私の耳もとに残り、言葉を発した相手もおそらくもう一方の切れ端を自分の口のなかで味わっているでしょう。波が引いて、私が自分の肩のあたりに相手の存在を感じたときには、切れ切れになった言葉は再び合わさり、会話は先へと進んでいきます。なにごともしなかったかのように会話は進行していくのも、ふたりが、歩いているからです。

また別の日、私はわきを歩く人の不機嫌を肩のところで感じていました。白々とした気分でそれを感じていました。人を避けて横に飛び、言葉が切れ、不確かな瞬間が生まれ、しかしそれを埋める言葉を繰り返すのも物憂く、一度発した言葉が消えるにまかせ、もう語ることはやめて黙って歩いていきます。たがいになすすぐ前を見て、歩いています。靴の下の固い石の感触。肩のとなりにいる人間が生きた人間であって単なる木偶の坊ではなく、その者もまた、私には分からないが、まったく分からなくもない、ある心理状態にいて、胸を波打たせているのだということを感じており、それに自分がかかわっているにもかかわらず、なにもできない私の不器用さを一步一步に感じつつ、渦巻く脳髓の燃焼を抑制しつつ、歩いていました。

*

歩く。歩きながら内部に生じるさまざまな現象の知覚をその微妙なニュアンスにいたるまで書き留めていくなら、歩くことに付随するものは限りなく増大していった、「純粹に」歩くなどということはありえない、と思わざるをえません。しかし、私たちは平気で「歩く」といっています。事を複雑にするのは、二本足で立つことによって、地面と接触する足の裏と垂直に対極に位置することになった、脳髓のせいでありましょうか。

歩くこと。こういう場合たいてい、「広辞苑」によるととて、ある言葉の意味を一度確定し、現実とそれとのギャップを指摘し、現実の歪みを批判する手がかりとすることがありますが、しかしそれは時に、「裸の」概念の意味づけを、「権威ある」辞書に求めて、多様な現実を裁くことにもなる。そのようなことを念頭において、そろそろ広辞苑を開いてみましょう。「一步一步踏みしめて進む。歩行する。あゆむ。」大辞林では、「人や動物が普通の足取りで、体を前方に移動させる。歩行する。あゆむ。」

時に放心状態で歩くことのある私には、「一步一步踏みしめて」という表現はこたえます。

戦時中に少年時代を過ごした者にとっては、歩くことについて、いい思い出はありません。「歩け、歩け」の掛け声が蘇ります。

あの頃、歩くことを、集団で、隊伍を組んで歩くことを徹底させようとしていました。軍事教練の時間でした。運動場を何周も歩きました。あれは行進というべきかもしれないが、ともかく、歩き方についてこまかく注意されました。軍事教官、またはその助手が神経質なほど細部にこだわって、しかも絶えず同一箇所を拘泥して注意の甲高い叫びを発していました。何をぼやぼやしているんだ。何を考えてるんだ！ 頭のなかのものを完全に抜き取って歩くことが要求されたのであります。

しかしそこにもまた夾雑物がまぎれこむのでした。というのも、やがて、足並みがそろってくると、あるいは、みんなに少しだれた感じが現われると、軍歌を歌わされました。歩くことを強制する者自身が、「歩くこと」そのものに撤しえなかったわけです。当初から歩くことは手段でありました。愛国的戦闘的精神育成のためでした。

こうして歩くということは時流の手垢にまみれていたのでした。「道德の世界の概念や規則は、煮詰めに煮詰めた比喻であって、そのまわりには、耐えがたいほどに脂ぎった人間性の湯気がたちこめている。」
【『特性のない男』】

歩く。ただ歩く。歩いている。そういう場面が、今、忽然と浮かんできます。

八甲田山の吹雪のなかに、あるいは、ポーランド南部の荒野の鉄条網によって嚴重に仕切られたなかに、赤道直下の密林地帯の曲がりくねった石ころだらけの道に、シベリアの酷寒の地に、うごめき、よろめく黒い姿、暗い群れが、蘇ってきます……

歩くことを止めるのは死を意味していたところの情景が。

*

歩くという行為には、移動が伴います。あたりまえのこととなっていますが、人は移動するために歩く。それで事が厄介になるのでしょうか。

どこへ歩いて行くのか。そのことがいつも、どこかで、問題になっています。何らかの目的 [地] の設定が、意識的にせよ無意識にせよ、前提となっています。小さな家のなかでも、何かをするために、ある場所へ、歩いて行きます。何をするためにここにやって来たのか、ふと忘れてしまうことがあったりすると、ボケたのかなと思って、ちょっと自分が不安になります。

目的なく歩くというのは、あてどもなく歩くというのは、市民社会においては、たとえ一時的にせよ、アウトサイダーであらざるをえないでしょう。ポオの老人の表情を見ればよい。彼の衰弱を。気難しい、孤独な、その内側には解読しがたい悪魔的なものの存在を予感させる表情を。頹廢の姿に、「私」は、はっとしたのです。

たしかに、何の目的もなく、気楽に歩けばいいんだ、という気持ちになるときがあります。目的もなくぶらぶら歩きたい。フラヌールへの願望です。日常の拘束からのひとときの離脱、しかし、目的なく歩くことにやがて耐えられなくなっていく。途中で飽きてしまいます。どこへ行こうかと、思案しはじめます。そろそろ帰ろうかと。日常の場へと。なれ親しんだ目的のある場所へ。拘束された気軽さのほうへ。

「歩く」ということについて、オーストリアの現代作家ペーター・ローザイが、われわれはどこへ向っているかを独特の乾いた文で示してくれています。オーストリア的な、空虚さへの感覚を匂わせて。自己の基点も、未来への見通しももちえぬ者のために。

歩くということ (das Gehen) について、意見が二つに分かれている。歩くことは、つねにある場所から離れてゆくことだと考える人たちがいる。そしてもう一方では、歩くことは、つねにある場所へ向かってゆくことだと考える人たちがいる。前者は過去と、後者は未来と関係しているのである。だが、もう一つ、別の歩き方がある。「それはただどこかへ行く途中であるという状態で、どこでもないところから、どこでもないところへと歩いている。歩くために歩いている。この種の歩行にも、それなりにある一つの意図が根底にあって、たとえ目的のない、意味をもたない歩行であろうと、歩いて移動していることのほうが、静止しているよりもよいという気持ちがそこにはたらいっている。」

「歩くことは、無限の現在における営為、ということになる。歩いているかぎり歩いているのであり、つねに今、歩いているのである。」

「歩くことには一種の自己欺瞞がつきまとう。見渡しようかぎり、道は、ただただ無限に長く思われる。実際は、前もって、ひとつの終着点 (ein Ende) が容赦なく設定されているのであるけれども、歩いている間は、そのようなものはないと思いこむ。われわれは歩いている間は、死をくい止めていると思いこんでいる。(……) Z 地点をわれわれは考えたくないのである。だから、できるかぎりアルファベットの最初の部分にかかわってしようとする。何百回となく、A から B を行き来し、そしてやっと、B から C へ行こうと決心する。C へ行ってしまうと、今度は、この状態を持続的なものにしたいと思う。絶え間なく、C から B へ、C から A へ、A から B へ、そしてまたそこから C へ行くことによって。しかし突然、われわれは、D にいることに気づく。」

「歩いている間は、一時的なものにせよ終局的なものにせよ停止の瞬間を覚悟することは一度としてない。そのような覚悟はもたずに、D へ、E へ、F へ歩こうとする。だが、A のつぎが、あるいは B のつぎが、または C のつぎが、Z であることもありうるのだ。」

「歩く、歩くことをやめない、歩くことをやめようとしない、だが、おそかれはやかれ、停止する、足を止めなければならない。なぜなら、もうこれいじょう先へはいかないからであり、疲れ切ってしまったからであり、つまり、突如、驚いたことには Z に到達しているからである。」

*

さて、このくらいにしておきましょう。歩く。gehen (歩く・行く)、Grund (底・根底) まで行く、zugrunde gehen (水底へといたる：死ぬ)。呪文のように唱えていますと、死を考えるとすべては無価値であるというテーゼを立て、繰り返し現実の愚劣を抉り弾劾する作品を発表した、もうひとりのオーストリアの作家のことを思い浮べてしまいます。彼も『歩く (Gehen)』という小説を書いています。数年前に亡く

なりました。私より一歳上でした。しかしこの作家のことは別の機会にゆずります。

あれをZ点だといってよいと思いますが、一昨年、私も、そのあたりまで行きました。ただ、発作のときその自覚があったかどうか。心電図は激しく不規則な上下運動を示していたのに、意識ははっきりあり、病名を告げられたときには、まさかと思い、何ともいえないものがわいてきました。一筋の気持ちに自分がおさまっていくのを感じました。それをいま分析したりすると、散ってしまいます。非常に危険な状態にあるということは知っておいてください、しかし血栓を溶かすなど処置はちゃんとしていますから安心して、若いお医者さんからいわれました。薄暗い病室でした。非常勤で当直のその先生の落ち着いた様子が気持ちを安定させてくれました。さて、「突如、驚いたことにはZに到達している」というのは、すでに起こった状態について述べる言葉としてはちょっと変です。そのときには彼はそれを意識できないはず。しかしやはりそれでも、「突如、驚いたことには」ということになるでしょう。Z地点を信じたくない心の一方で、事柄を意識し分析し整理せずにはいられないのも人間のです。私もまた発作の原因について医師に聞きました。答えは、原因の確定は困難で、起きるときは起きる、としかいいようがない。胸のあたりがちくちくするので、なぜかと尋ねると、そういうのは実はなんでもなく、重大なことは見えないところで起きるものですよといわれたこともあります。しかし現象を直ちに意味づけして、不安を増大させることはだいぶなくなりました。自分の血管の「赤裸の姿」を見たせいでもあります。このような不確定ななかで、心臓カテーテル検査の結果をビデオで見せられ、狭まり膨れた自分の血管が、海のなかの若布のようにたよりなげに薄暗い画面にひらひらと漂う様子を目のあたりにしたのです。私はそのとき自分を臓器として感じていました。たよりなげに漂う自分のその一部に、よくぞがんばってきてくれたなと感謝しながら。

ともかく、まだ歩けます。「もうこれいじょう先へはいかない」という状態ではないことはいまの瞬間たしかです。それに、綿密に組み立てられたリハビリのプログラムにそって「歩く」訓練をしました。ベッドごと上半身を10分間・40度起こすことからはじめて、やがて、看護婦さんに助けられて床に両足をつけ、そろそろと歩きだしました。先ほど、荒野にて歩く人々

を想起しましたが、死と結びついた歩行に対して、これは治癒のためのものでした。あまりに隔たった対比です。それでも不安のなかで開始されました。1分間歩行を何日かつづけ、はじめて歩くことをおぼえた者のように日々を送り、退院のときには（一か月後）、千米歩くようになりました。辞書のとおり「一歩一歩踏みしめて」歩いていました。いまでは、その時期を聖なる時のように思います。俗なる日常に戻ってしまっている今日では、当時を思い、歩を改めます。

いま、「戻る」と書きましたが、慎重にも、担当の医師は、「回復」という言葉は使われませんでした。少なくとも何分の一かの心筋が壊死している現在（しかし側副血行路ができたりしていくのですが）、もとに戻るといえることはない。そのようなとき、「現状維持でもよしとし……」などという言葉が脳裏をよぎりますが、これも希望的観測にすぎないといわねばならないと思直します。絶えず歩いている。絶えずある地点へと向かっている。しかしまた、ベッドにいるときにはもう二度とできまいと思ったことが徐々に可能になってきていますし、心がけしだいでは、そしてそれだけのことに恵まれれば、この発作に襲われなかったならばそうはならなかったであろうかたちで、自分のものが表現できるようになるかもしれません。時の作用については、ドイツ語が、Zeit（時間）からzeitigenという動詞（[時間の経緯のなかであるものを]生むの意）を作ってくれていますが、限界の意識のなかで、あらためて時間というものが痛切な意味をおびて浮かんできます。それとともに、反復とか想起といったことどもがあらたな光のなかに現われてきそうです。そしてある日、突然、Z点にいるということになったとしても。

さて、ここまでまいりましたら、部屋を離れ、外へ出てみます。ドアを開けましょう。二月の風に耐えられる服装をして、そしていつもの道を下って行きます。いつもの道ですが、いつもとは違うかもしれません。まず角まで行って、それから、右へ行くか、左にするか、考えることにしましょうか。（1994年3月）

* * *

ヴァルター・ベンヤミン『パリ——十九世紀の首都』（1935年）川村二郎訳。

『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』（1938年）野村修訳、（晶文社・ヴァルター・ベンヤミン

- 著作集 6)).
- エドガー・アラン・ポオ『群集の人』(1840年) 中野好夫訳. 『実業家』(1840年) 宮本 陽吉訳. 『室内装飾の哲学』(1840年) 松原正訳, (東京創元社・ポオ全集).
- ローベルト・ムージル『特性のない男』(Der Mann ohne Eigenschaften. 第一巻1930年, 第二巻32年, 未完. 52年膨大な遺稿が整理され全編刊行, 78年大幅改訂).
- ハラルト・ヴァインリヒ『うその言語学——言語は思考をかくす事ができるか』(1966年) 井口省吾訳.
- (大修書店).
- 半田俊之介『心臓病——突然死を防ぐ本』(1986年, 主婦と生活社), その他.
- モンテーニュ『エッセー』(1572-92年) 原二郎訳.
- ルソー『孤独な散歩者の夢想』(1782年) 青柳瑞穂訳.
- リルケ『マルテの手記』(1910年) 杉浦博訳.
- 梶井基次郎『檸檬』(1939年).
- Peter Rosei: Wege (Erzählungen, 1974).
- Thomas Bernhard: Gehen (1971).
- [ふじい ただし 横浜国立大学経営学部教授]